



TOTTORI CITY

第 4 章



鳥取市を代表する 歴史文化



鳥取市を代表する歴史文化について

第3章では、本市を6つの地域に分け各地域の歴史文化の視点で把握し、41のストーリーで「各地域で醸成された歴史文化」をつぶさに捉えました。

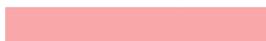
第4章ではこれらを踏まえ、各地域で共通する歴史文化のテーマを総合し、本市全体の歴史文化の視点として把握したものを、「鳥取市を代表する歴史文化」として提示します。

本市は、千代川や日本海などに育まれた豊かな自然とともに、「因幡国」として山陰地方の東の玄関口として栄えてきました。

鳥取砂丘の形成も含めた自然の営みとともに歩んできた先人たちは、様々な古墳や城・マチ・ムラを築き上げ、特色ある祭礼や伝統行事、伝統産業を生んできました。

この地域に生きた人々の記録は、石造物等に刻み込まれ、全国に知られる因幡の白兔の話などが人々の間で大切に語り継がれ、現在まで伝わっています。本構想では本市の各歴史文化を7つのテーマに分けてとりまとめています。

6つの地域

- | | | | |
|----------|---|----------|---|
| ①因幡万葉地域 |  | ④湖山池周辺地域 |  |
| ②砂丘農業地域 |  | ⑤鷲峰山麓地域 |  |
| ③鳥取市街地地域 |  | ⑥鳥取市南部地域 |  |

1 鳥取市の豊かな自然と歴史

第3章のストーリー名	第3章の頁
1. 古代因幡国の中心地・因幡国府	P87
3. 豊かな森と水そして信仰	P91
8. 地形の変遷と人々の暮らし	P103
9. 砂丘農業発展に寄与した先人たち	P106
12. 鳥取平野の歴史	P119
18. 災害と復興～都市の再生～	P135
19. 鳥取砂丘と久松山が織りなす自然	P138
21. 伝説の舞台となった自然	P146
22. 太古の人々の暮らしと祈り	P149
26. 湖山砂丘の開発に挑んだ人々	P157
28. 縄文からの交易地と中世の動乱	P168
29. 古代山陰道と青谷上寺地遺跡	P170
32. 海岸線に見る江戸時代からの歴史	P177
33. 鷲の湯伝説と貝がら節	P179
35. 古代から近世の交通の要衝	P189
37. 山あいに残る様々な信仰	P193

2 山の道と海の道と汽車の道

第3章のストーリー名	第3章の頁
4. 街道に残る道しるべ	P93
10. 但馬と国府への街道	P108
13. 交通の要衝 「久松山」	P122
14. 鳥取平野南部の歴史	P125
17. 山陰本線と地域の近代化	P133
21. 伝説の舞台となった自然	P146
23. 鹿野往来と山あい	P151
27. 海上交通の港まち 「賀露」	P159
29. 古代山陰道と青谷上寺地遺跡	P170
32. 海岸線に見る江戸時代からの歴史	P177
35. 古代から近世の交通の要衝	P189
38. 舟運と鮎のまち	P195
39. 用瀬宿とひな送り	P197

3 城と町と街道

第3章のストーリー名	第3章の頁
5.中世山城や近代化遺産	P94
10.但馬と国府への街道	P108
15.城下町鳥取のなりたち	P127
17.山陰本線と地域の近代化	P133
24.湖山池畔の水上交り都市と山城	P153
28.縄文からの交易地と中世の動乱	P168
31.亀井茲矩と鹿野城	P174
35.古代から近世の交通の要衝	P189
39.用瀬宿とひな送り	P197

4 四季の祭りと伝統行事

第3章のストーリー名	第3章の頁
7.因幡を代表する祭りと踊り	P98
11.海辺の信仰と伝承	P110
16.池田光仲が残した遺産 ～鳥取東照宮と麒麟獅子舞～	P131
27.海上交通の港まち「賀露」	P159
32.海岸線に見る江戸時代からの歴史	P177
40.「麒麟獅子」と「神楽獅子」 二つの獅子舞	P199

5 石ぶみが語り伝える歴史

第3章のストーリー名	第3章の頁
2.万葉の歴史を彩った人たち	P89
9.砂丘農業発展に寄与した先人たち	P106
20.唱歌のふるさと	P140
25.因幡の相撲と力士塚	P155
26.湖山砂丘の開発に挑んだ人たち	P157
31.亀井茲矩と鹿野城	P174
34.石工「川六」	P181

6 伝説と伝承に見る因幡のものがたり

第3章のストーリー名	第3章の頁
6.古代からの伝承	P96
11.海辺の信仰と伝承	P110
12.鳥取平野の歴史	P119
21.伝説の舞台となった自然	P146
32.海岸線に見る江戸時代からの歴史	P177
37.山あいに残る様々な信仰	P193
41.「佐治谷ばなし」と伝統産業	P201

7 民藝運動と地域の伝統産業

第3章のストーリー名	第3章の頁
18.災害と復興～都市の再生～	P135
30.溶岩台地がもたらした豊かな水源	P172
36.八上比売と焼き物の郷	P191
41.「佐治谷ばなし」と伝統産業	P201

日本遺産

本市には日本遺産に認定された二つのストーリーがあります。これらは本市をまたぎ、歴史文化を共有する市町村とともに広域的な視点で捉えたものとなっており、本構想の資料編で紹介します。

1 日本海の風が生んだ絶景と秘境—幸せを呼ぶ霊獣・麒麟が舞う大地「因幡・但馬」

2 荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間～北前船寄港地・船主集落～

1

鳥取市の 豊かな自然 と歴史

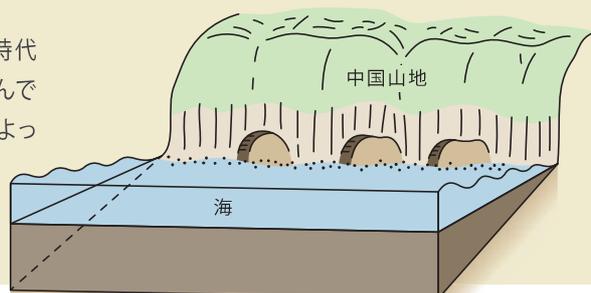
本市は、緑豊かな自然、千代川の清流や鳥取砂丘を代表とする美しい自然景観に恵まれています。

その中で先人たちは、山の幸、海の幸など自然からの豊かな恵みを受けながら古代より因幡の国の歴史や多彩な伝統文化を育んできました。

鳥取砂丘ができるまで

砂丘形成以前

かつぼ
地球上に恐竜が闊歩していた時代
海岸線に砂丘は形成されていません
でした。その後の火山活動などによっ
て、約6千万年前頃に花崗岩に
よる中国山地が形成されました。





●時代ごとの自然環境と代表的な歴史文化遺産

近・現代

近世

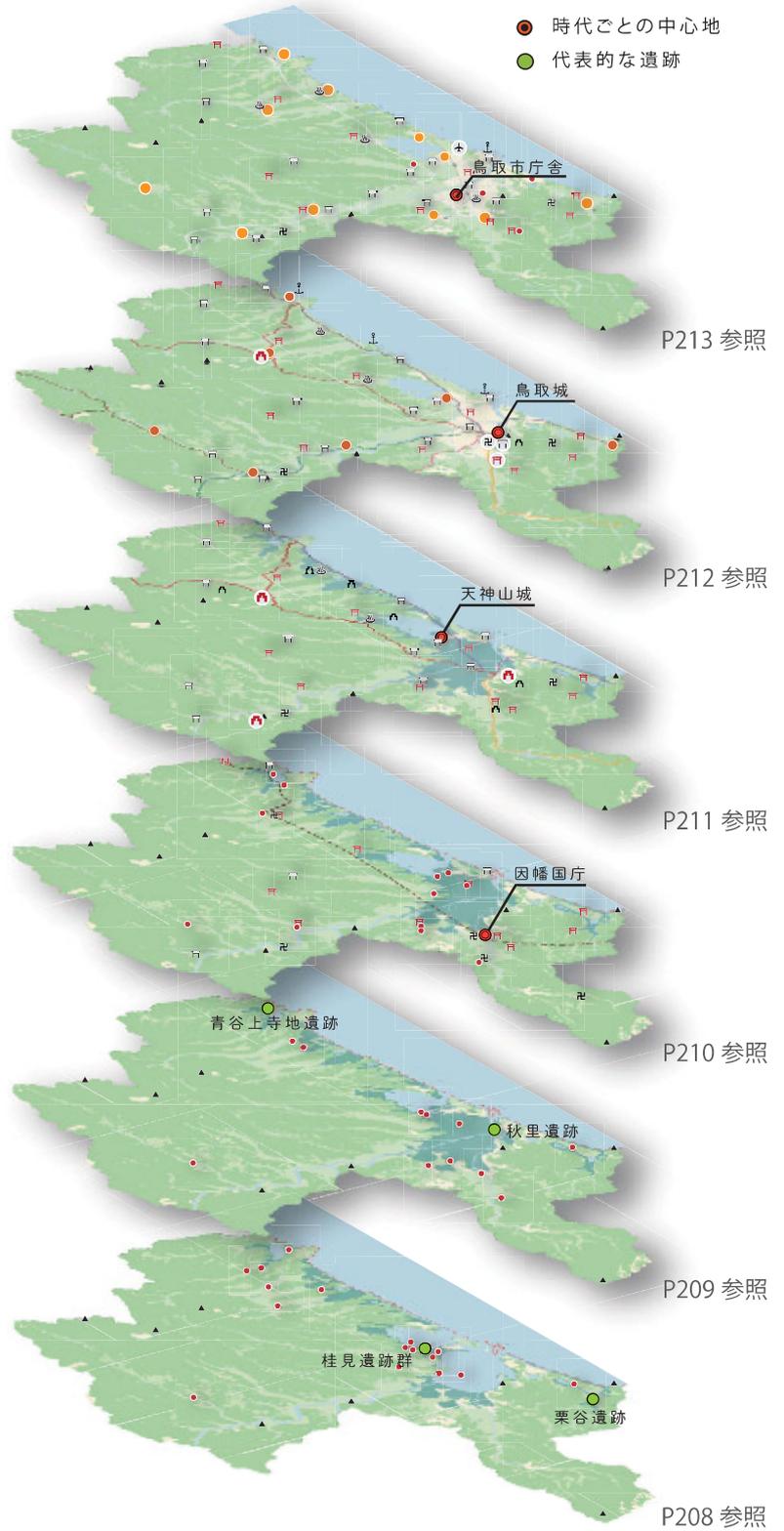
中世

古代・古墳時代

弥生時代

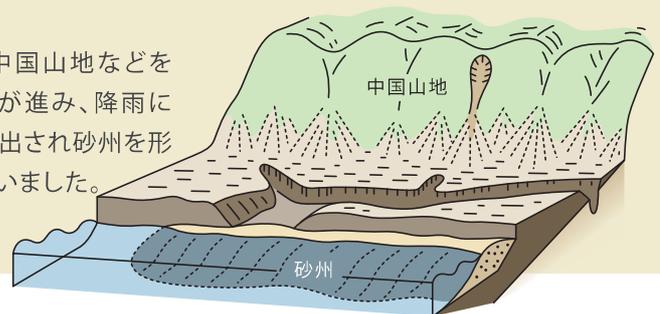
縄文時代

- 時代ごとの中心地
- 代表的な遺跡



砂丘形成の準備

約200万年前頃から、中国山地などを覆っていた花崗岩の風化が進み、降雨によって浸食されて海に運び出され砂州を形成し、砂丘形成の準備が整いました。



1 鳥取市の豊かな自然と歴史

縄文時代

約6,000年前の地球規模の気候の変動によって温暖化が始まり、海面は徐々に上昇し、現在よりも数メートル高くなり、海が内陸部まで到達し、内海になっていました。

この頃の人々は沿岸部や内陸部に住み、狩猟や漁労など、自然の恵みを受けながら暮らしていました。



縄文時代の遺跡から発掘された土器や木製品などから、当時の人々の暮らしがうかがえます。



● ラグーン地帯 (湖山池)

- 代表的な縄文時代の遺跡 / 栗谷遺跡、桂見遺跡群
- 縄文時代の遺跡 /
 - ① 日光長谷遺跡、② 柄杓目遺跡、③ 葛谷遺跡、④ 高住井手添遺跡
 - ⑤ 高住牛輪谷遺跡、⑥ 布勢第1遺跡、⑦ 古海遺跡、⑧ 直浪遺跡
- 潟湖 (ラグーン地帯) 推定範囲



● 栗谷遺跡出土品

旧石器～縄文時代 (~6000年前)

海岸線の入りくんだ内湾でしたが、湾口に砂州が形成され、古砂丘が形成されました。5万年前以降に噴火した大山の火山灰が砂丘を覆い、その後の海退期にはげしい飛砂が生じて新砂丘が形成されました。



弥生時代

地球の寒冷化により海水面が下り、平野部に稲作に適した沼沢地が出現したことで、水田稲作がはじまり、各地域の河岸段丘上や丘陵裾部に人々が暮らし始めます。また潟湖周辺の集落は稲作だけではなく、沿岸交通と交易の拠点となり、各地域と人やモノの交流がありました。



- 代表的な弥生時代の遺跡 / 青谷上寺地遺跡、秋里遺跡
- 弥生時代の遺跡 /
 - ① 会下・郡家遺跡、② 乙亥正屋敷廻遺跡、③ 西柱見墳丘墓、④ 柱見遺跡群、⑤ 岩吉遺跡、⑥ 安田遺跡、⑦ 糸谷1号墓、⑧ 直波遺跡
- 潟湖(ラグーン地帯)推定範囲

天然の良港となっていた潟湖から船で日本海に漕ぎ出し、朝鮮半島や日本各地との交流や交易を行っていたと考えられます。



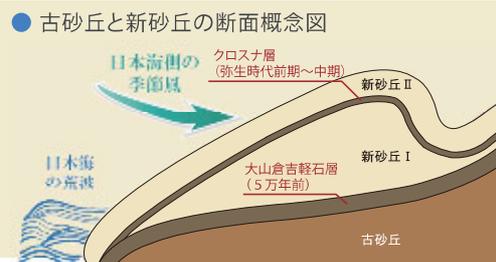
● 青谷上寺地遺跡周辺の再現CG
提供: 鳥取県



● 柱見遺跡から出土した丸木舟

弥生時代
(~3000年前)

大山火山灰層(大山倉吉軽石層)を挟んで上下2層の砂丘があり、上位は新砂丘、下位は古砂丘と呼ばれています。新砂丘はクロスナ層と呼ばれる砂丘活動の休止期の地層を挟んで新砂丘I、新砂丘IIと区分され、新砂丘の下位のクロスナ層からは弥生土器片が発見され、弥生時代の当時の人々の生活の場となっていたことが想像できます。



1 鳥取市の豊かな自然と歴史

古代・古墳時代

因幡国が誕生し、巨濃郡・法美郡・邑美郡・高草郡・気多郡・八上郡・智頭郡の七郡に分けられました。この頃は鳥取平野に潟湖が残っており、因幡の政治の中核である国庁は、地盤が安定していた現在の国府町に置かれていました。全国の国庁や各郡を結ぶ交通のネットワークも整備され、本市を通る山陰道もそのうちの一つでした。



古代の因幡国の中心地因幡国庁が国府平野に置かれ、その周辺には古代寺院や宇倍神社が造営されました。



● 因幡国庁跡

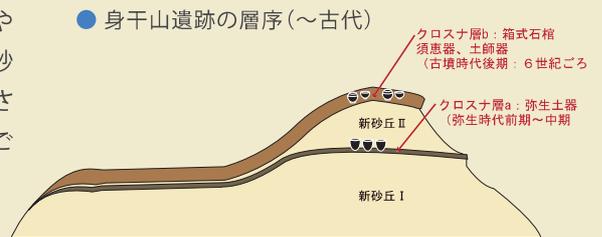


● 宇倍神社

- 行政中核／因幡国庁
- 古墳時代・古代の遺跡／
 - ① 青谷上寺地遺跡、② 青谷横木遺跡、③ 上原遺跡群、④ 大熊段古墳、⑤ 布勢古墳、⑥ 岩吉遺跡、⑦ 本高14号墳、⑧ 古郡家1号墳、⑨ 六部山3号墳、⑩ 嶽古墳、⑪ 梶山古墳
- 卍 古代寺院／
 - 1寺内廃寺、2吉岡大海廃寺、3菖蒲廃寺、4大安興寺、5国分寺、6国分尼寺、7等ヶ坪廃寺、8岡益廃寺、9 栃本廃寺
- ㊦ 代表的な式内社(『延喜式』にまとめられた『延喜式』の神名帳に記載されている神社)
 - A幡井神社、B加知弥神社、C天日名鳥命神社、D伊和神社、E大和佐美命神社、F売沼神社、G中臣崇健神社、H宇倍神社、I美歎神社、J荒坂神社、K服部神社
- ㊦ 代表的な式外社(『延喜式』の神名帳に記載されていないが、当時から存在していた神社)
 - L相屋神社、M賀露神社、N松上神社、O犬山神社
- 潟湖(ラグーン地帯)推定範囲

砂丘と人々の暮らし

白兔の身干山遺跡におけるクロスナ層の露頭や出土遺物は地層年代の指標になっています。新砂丘Ⅰの下位クロスナ層からは弥生土器片が発見され、上位クロスナ層からは古墳時代後期(6世紀ごろ)の須恵器、土師器などが発見されています。



中世

武家社会となった鎌倉時代以降、潟湖が乾き平野となったところに、皇室領や京都・奈良の寺領となった荘園が経営されました。これらの場所では開発領主が成長し、小勢力が乱立していきます。因幡国の中心地が国府平野から鳥取平野へと移った頃には、「村々の山城」が築かれていきました。そして戦国時代に入り、織田信長の中国侵攻によって、羽柴秀吉の鳥取城攻めが行われます。

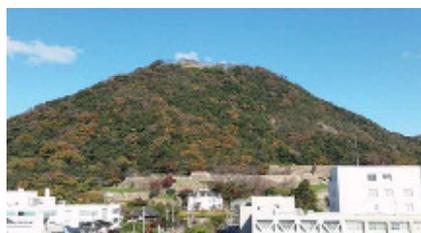


- 行政中核／天神山城
- 🏰 代表的な拠点城郭／鳥取城、鹿野城、景石城
- 🏯 代表的な山城跡／①狗尸那城、②勝山城、③宮吉城、④大崎城
⑤防己尾城、⑥丸山城、⑦雁金山城、⑧太閤ヶ平
⑨龜山城
- 🏯 代表的な式内社／A幡井神社、B加知弥神社、C天日名鳥命神社、D伊和神社
E大和佐美命神社、F売沼神社、G中臣崇健神社、H宇倍神社
I美歎神社、J荒坂神社、K服部神社
- 🏯 代表的な神社／a相屋神社、b子守神社、c 鷲峯神社、d 茂宇気神社、e白兔神社
f 賀露神社、g山王日吉神社、h立見神社、i聖神社、j倉田八幡宮
k松上神社、l倭文神社、m熊野神社、n犬山神社
- 🏯 寺院／A大安興寺、I摩尼寺
- 🌊 港湾／青谷港(芦崎港) 🌊 温泉／g 勝見温泉、I 吉岡温泉
- 🟩 潟湖(ラグーン地帯)推定範囲

「村々の山城」は市内各所に残っており、中でも因幡国の中心地となった天神山城跡や鳥取城跡は、文化財として保存されています。

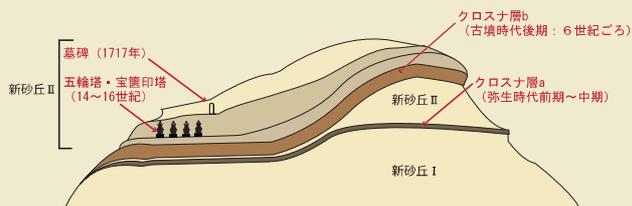


● 天神山城跡



● 久松山の山頂に築かれた鳥取城跡

● 身干山遺跡の層序(中世・近世)



砂丘と人々の暮らし

クロスナ層より上に形成された新砂丘Ⅱの層からは、中世(14世紀~16世紀)の五輪塔や宝篋印塔や、享保2年(1717)の墓碑が発見されました。これらの発見によって、当時の砂丘地の街道としての利用や人々の生活をうかがうことができます。

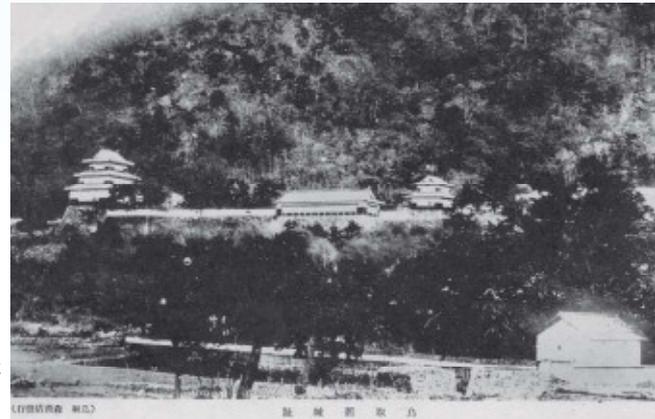
1 鳥取市の豊かな自然と歴史

近世

因幡・伯耆合わせて32万石の鳥取藩が成立すると、鳥取城は近世城郭として整備され、袋川の付け替えも含めた城下町の整備が行われました。また鳥取城を中心とし、各地につながっている街道が整備され、参勤交代に使用された智頭往来沿いには、宿場町等が設けられます。また賀露港などの港が整備され、それらは現在の鳥取市の原型となっています。



当初は山城であった鳥取城は、因伯32万石に相応しい城郭とするため改修が繰り返し行われ、近世城郭として生まれ変わりました。



● 鳥取城 明治12年(1871)
写真提供: 鳥取市歴史博物館

- 行政中核/鳥取城
- 街道沿いの町/湖山、細川、河原、用瀬、佐治、鹿野、青谷
- 代表的な城郭/鳥取城、鹿野城
- ▭ 代表的な式内社/A幡井神社、B加知弥神社、C天日名鳥命神社、D伊和神社、E大和佐美命神社、F売沼神社、G中臣崇健神社、H宇倍神社、I美歎神社、J荒坂神社、K服部神社
- ▭ 代表的な神社/a相屋神社、b子守神社、c鷲峯神社、d茂宇気神社、e白兔神社、f賀露神社、g山王日吉神社、h松上神社、i樋口神社、j刈地神社、k東井神社、l三角山神社、m犬山神社、n鳥取東照宮、o倉田八幡宮、p湯山神社、q細川神社
- ⌘ 寺院/ア観音院、イ摩尼寺
- ⚓ 港湾/ウ芦崎港(青谷港)、I賀露港
- ♨ 温泉/オ勝見温泉、カ吉岡温泉

砂丘の歴史

砂丘内を通る街道は、追後スリバチ等の谷部を通るなど、砂丘の地形を巧みに利用していました。また、砂丘を農地に変えるための開拓事業も各地で行われるようになりました。



● 追後スリバチ

近・現代

明治22年(1889)に鳥取市が誕生し、山陰本線の開通、久松公園の整備や、仁風閣、美歎水源地水道施設、荒舟発電所の建設等により、近代化を迎えます。一方、度重なる千代川の氾濫や鳥取大地震、鳥取大火等の災害を受けますが、その度に復興し、千代川の付け替え工事や殿ダムの建設による洪水対策等も実施され、自然との共存のための努力は今も続いています。



- 行政中核／鳥取市庁舎
- 代表的な歴史文化遺産／
 - ①20世紀梨の親木、②仁風閣、③五臓圓ビル、④旧美歎水源地水道施設
- 地域生活拠点(鳥取市都市計画マスタープランで設定)／
 - 津ノ井・若葉台、鳥取大学前、末恒、国府、福部、河原、用瀬、佐治、気高、鹿野、青谷
- 代表的な内社／A幡井神社、B加知弥神社、C天日名鳥命神社、D伊和神社
E大和佐美命神社、F赤沼神社、G中臣崇健神社、H宇倍神社、I美歎神社
J荒坂神社、K服部神社
- 代表的な神社／a相屋神社、b子守神社、c鷲峯神社、d茂宇気神社
e白兔神社、f賀露神社、g山王日吉神社、h松上神社、i樋口神社、j刈地神社
k東井神社、l三角山神社、m犬山神社、n鳥取東照宮、o倉田八幡宮、p湯山神社
q細川神社、r木之実神社
- ☩ 寺院／ア摩尼寺 ☩ 温泉／イ浜村温泉、ウ鹿野温泉、エ吉岡温泉、オ鳥取温泉、カ湯谷温泉
- ⚓ 港湾／キ鳥取港(賀露)、ク酒津港、ケ青谷港 ✈️ 空港／鳥取砂丘コナン空港(鳥取空港)

河口付近で大きく蛇行していた千代川は、たびたび大洪水を引き起こしました。そのため大正期から昭和初期に、千代川の付け替え工事が行われ、現在の姿となっています。



● 大洪水の被害を受けた鳥取市内の様子
写真提供：鳥取市歴史博物館



● 千代川付け替え工事の様子
写真提供：国土交通省中国地方整備局
鳥取河川国道事務所

砂丘の歴史

砂丘を農地に変える努力は引き続き行われ、スプリンクラーなどによる灌漑によって、らっきょうなど鳥取を代表する特産物が生みだされました。また昭和30年(1955)に国の天然記念物に指定された「鳥取砂丘」は、山陰地方を代表する観光地となっています。



● らっきょう畑(福部砂丘)

2 山の道と海の道と汽車の道

山の道

山の道は、鳥取城下町を中心に、景石城下町を經由して美作に向かって伸びる智頭往来、若桜町の若桜城下町を経て播磨に向かう若桜往来という南北の道、鹿野城下町を經由して因幡と伯耆を結ぶ伯耆往来や、

鳥取城下

●智頭往来

鳥取藩主池田家の参勤交代にも使用された江戸時代の主要な街道の一つです。鳥取城から用瀬・智頭を経て美作・播磨へと至り上方・江戸へと通じています。因幡国が成立した頃から、姫路を經由して因幡と都をつなぐ街道として使われてきた道です。

●鹿野往来

鳥取から吉岡・末用を経て鹿野に入り、青谷で伯耆往来に合流するルートとなっていました。

因幡の国と伯耆の国を結ぶこの地方の大動脈であり、この道を中心としてたくさんの道が鹿野から四方に伸びています。

河原



河原の町並みと千代川



千代川のアユ

●河原

- 智頭往来が千代川を渡る位置にあり、参勤交代でも使用された渡し場が円通寺や渡一木に設けられていました。
- また河原は『古事記』の「因幡の素戔」に登場する八上比売の伝説が伝えられているほか、江戸時代から鮎漁を行ってきたことから、アユの町として知られてきました。

信仰・祭礼の道

松上神社



松上神社（鳥取市 松上）

●松上神社

- 松上大明神として信仰が厚く、佐治町等に広く氏子を持つ神社です。

吉岡温泉



吉岡温泉街の入口のゲート



温泉街の中にある足湯

●吉岡温泉

- 鹿野城主亀井茲矩や鳥取藩主池田家から庇護を受けて繁栄し、江戸時代には湯治場として栄えた温泉町です。

三仏寺・大山へと続く信仰の道もつながる鹿野往来という江戸時代の四街道をはじめ、いずれも峠山道の交通路です。現在も地域の主要な交通路となっています。



2 山の道と海の道と汽車の道

山の道

この4つの街道を中心に、因幡国庁を中心としていた古代から戦国時代にかけての重要路(十王峠など)、生活のために使われていた道(国府町谷の峰の観音堂、立見峠)、信仰・祭礼の道(松上神社の参詣

鳥取城下

● 若桜往来

若桜往来は、鳥取城と若桜を結ぶ街道で、若桜の谷筋の村々の豊かな物産を、大消費地である城下町鳥取へ運搬する重要な道でした。

また、若桜から播磨まで街道が延びており、近世から近代初頭までは伊勢参詣の道としても使われていました。

米里

● 道しるべ

街道沿いに現在残る石碑「右ハ村道左はいせ道」とあります。

播磨へと通じていた若桜街道は、江戸時代に流行した伊勢詣のための参道として、使用されていたと思われます。



● 法美往来

因幡国庁があった国府平野を通る街道で、因幡国の中心地が鳥取平野へ移る室町時代まで重要路となっていました。街道沿いには、因幡一之宮とされる宇倍神社・その傍には鳥取藩主池田家墓所などがあるほか、法美郡と鳥取城を繋ぐ街道です。

鳥取藩主池田家墓所

● 鳥取藩主池田家墓所

元禄6年(1693)初代鳥取藩主の池田光仲の死後にこの場所が選定され、歴代藩主と妻子らが葬られています。



©tottori Pref.

伯耆往来と但馬往来

日本海の沿岸に形成された砂丘地には、因幡国を東西に貫く街道が設けられていました。

● 伯耆往来

鳥取城下から千代川を渡り、湖山池の北側から白兔海岸を通り、青谷で鹿野往来と合流して伯耆国に至る街道です。

至伯耆国

青谷

白兔神社

鹿野往来

● 白兔海岸

白兔神社前の白兔海岸も街道として利用されたと考えられます。



白兔海岸の常夜燈と淤岐之島

湖山池

● 湖山池

日本海と切り離された潟湖で、拡大した湖山・末恒砂丘は街道として利用されたと考えられます。



写真提供：鳥取県文化財課

道、用瀬の三角神社周辺など)が、高い山を迂回し、谷や峠を越えて、点在する村々をつないでいます。また、大きな谷筋に流れる千代川、八東川、袋川などの河川は、近代にいたるまで重要な物資輸送路でした。

津ノ井

● 福田家住宅
鳥取県内最古の住宅建築です。福田家は、代々津ノ井村の庄屋などを務めた旧家です。



若桜

戸倉峠

至播磨国
至但馬国

宇倍神社

● 宇倍神社
因幡国一之宮とされる宇倍神社は、大化4年(648)の創建と伝えられ、麒麟獅子舞は、鳥取東照宮から伝わったとされるものです。



峰の観音堂

十王峠

至但馬国

街道は砂丘の海沿いと砂丘地内のスリバチ等内陸側の地形を利用していたと考えられます。

鳥取城下

浜坂砂丘

● 但馬往来

鳥取城下から福部を經由し、蒲生峠を越えて但馬国に至る街道です。通過する浜坂砂丘内では、地形を利用されていたと考えられます。

● 追後スリバチ
これらのスリバチの谷部に街道が通っていたと考えられます。



細川

蒲生峠

至但馬国

2 山の道と海の道と汽車の道

海の道

海の道は、砂丘と細かく入り組んだ入江で形成される海岸線に沿った小型船による漁業や近隣との海上交通、北前船の下り航路通商にも使われた大型船の寄港地(青谷、賀露)によって形づくられました。



● 芦崎のまちなみ
芦崎は、八軒屋と呼ばれた北前船の船主が軒を連ねていた港町です。今もその当時の町割りが残っています。



● 青谷上寺地遺跡(復元CG)
潟湖(ラグーン地帯)のほとりに位置し、モノや技術などが行き交う「交易拠点」の港湾であったと考えられます。

提供：鳥取県

河川交通

千代川を流れる豊かな水は、鳥取城下や賀露へと、千代川上流域との物資の運搬に活用され、高瀬舟や筏流しなどの河川交通が行われていました。



● 高瀬舟
高瀬舟は米や青物、薪炭などの様々な物資を積み、鳥取市街地へ出荷していました。その積載量は、1艘につき米俵数十俵分(駄馬二十五頭分)あったといわれています。

河原町誌より転載

古代より中国大陸を含む広域交通の拠点となっており、鳥取港の整備が進んでいるほか、各地の漁港も重要な生活拠点となっています。

酒津

小沢見

賀露
(現鳥取港)

岩戸

網代
岩美町

田後
岩美町



● 桂見遺跡の丸木舟
湖山池の南東岸に位置する桂見遺跡で見つかった丸木舟2艘は、外海を航行できる構造で水上を自由に航行していた縄文人の姿を想像させてくれます。

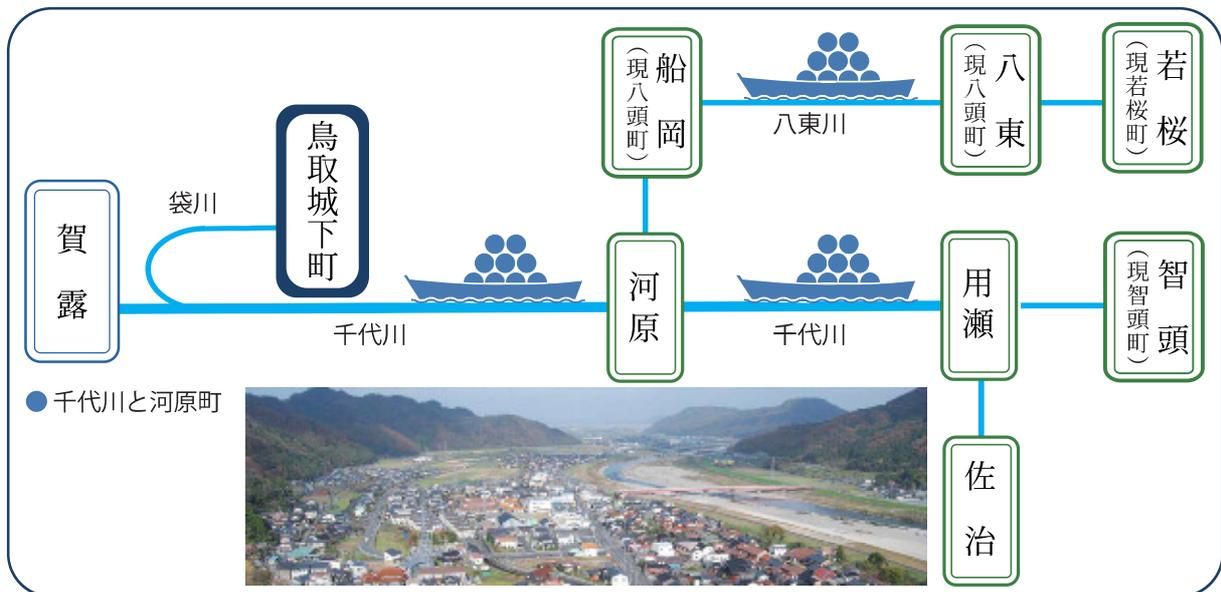
写真提供：鳥取県埋蔵文化財センター



● 賀露の港町
北前船船主が住んだ港町は、小路が海に向かう町割りとなっており、今も当時の町割りが残っています。

河川交通の要 河原

八東川と千代川の合流地点にある河原は、智頭・佐治から物資が集まる用瀬や、若桜方面などのから運ばれてくる物資が集まる中継点となりました。



2 山の道と海の道と汽車の道

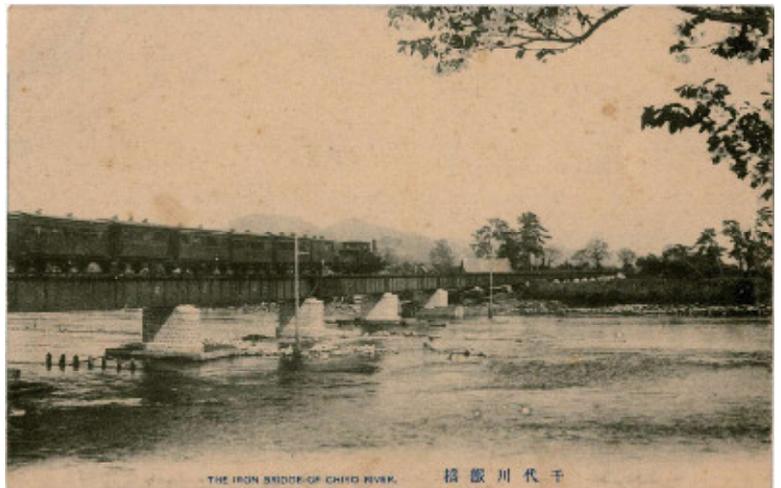
汽車の道

山陰道(丹波・丹後・但馬・因幡・伯耆・出雲・石見・隠岐国)は、古代の七道のひとつの行政区画であり、そこに設置された駅と駅を結んだ道路も意味していました。しかし、北は日本海に、東と南は中国山地を中心とする

●山陰本線の開通

明治25年(1892)に山陰鉄道の陰陽連絡線(境 - 米子 - 倉吉 - 鳥取 - 智頭 - 佐用 - 姫路)が官設で行われることが決まり、明治33年(1900)に境(現境港)から工事が始まりましたが途中でルートが変更され、現在の山陰本線の一部として京都 - 豊岡 - 鳥取 - 米子 - 出雲今市(現出雲市)が明治45年(1912)に開通しました。

明治5年(1872)の新橋—横浜間の鉄道の開通から40年遅れての「文明開化」でした。

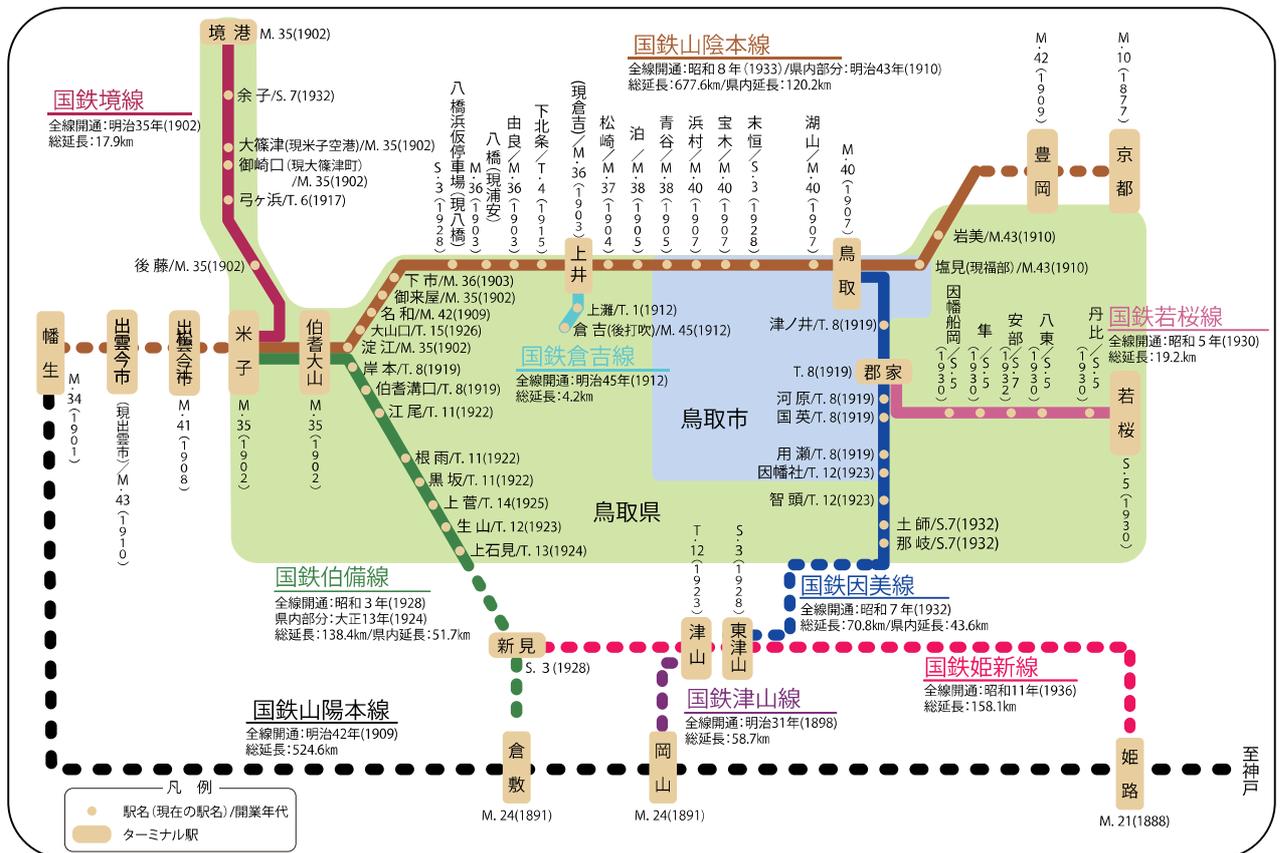


写真提供：鳥取市歴史博物館

昭和7年(1932)の因美線(鳥取-津山)の開通(津山からは津山線で岡山に接続)によって当初のコースを変えての陰陽連絡線も実現しました。

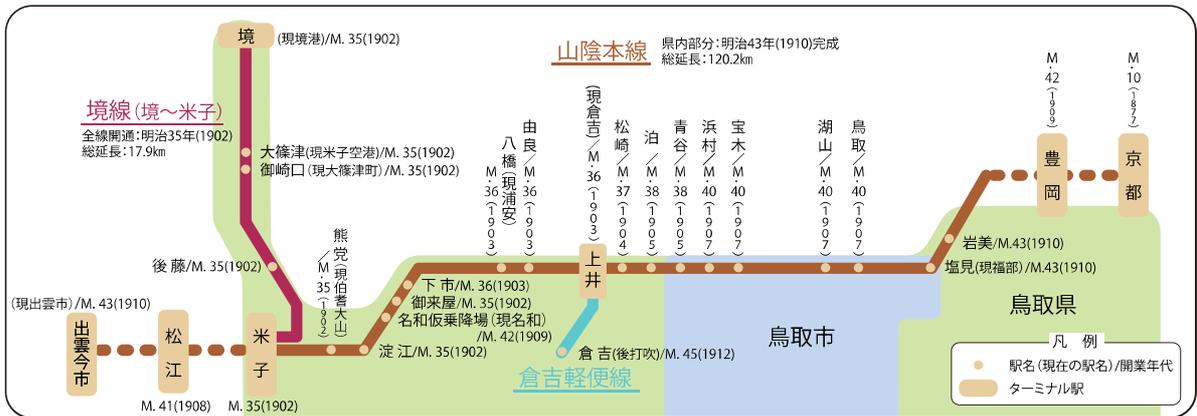
高度経済成長期以降、国道9号・29号・53号・373号などの整備が進み、自動車交通の時代に入ると、地方における鉄道の地位は低下し、昭和62年(1987)には国鉄は分割民営化されてJR(西日

●昭和12年(1937)の鳥取の鉄道網



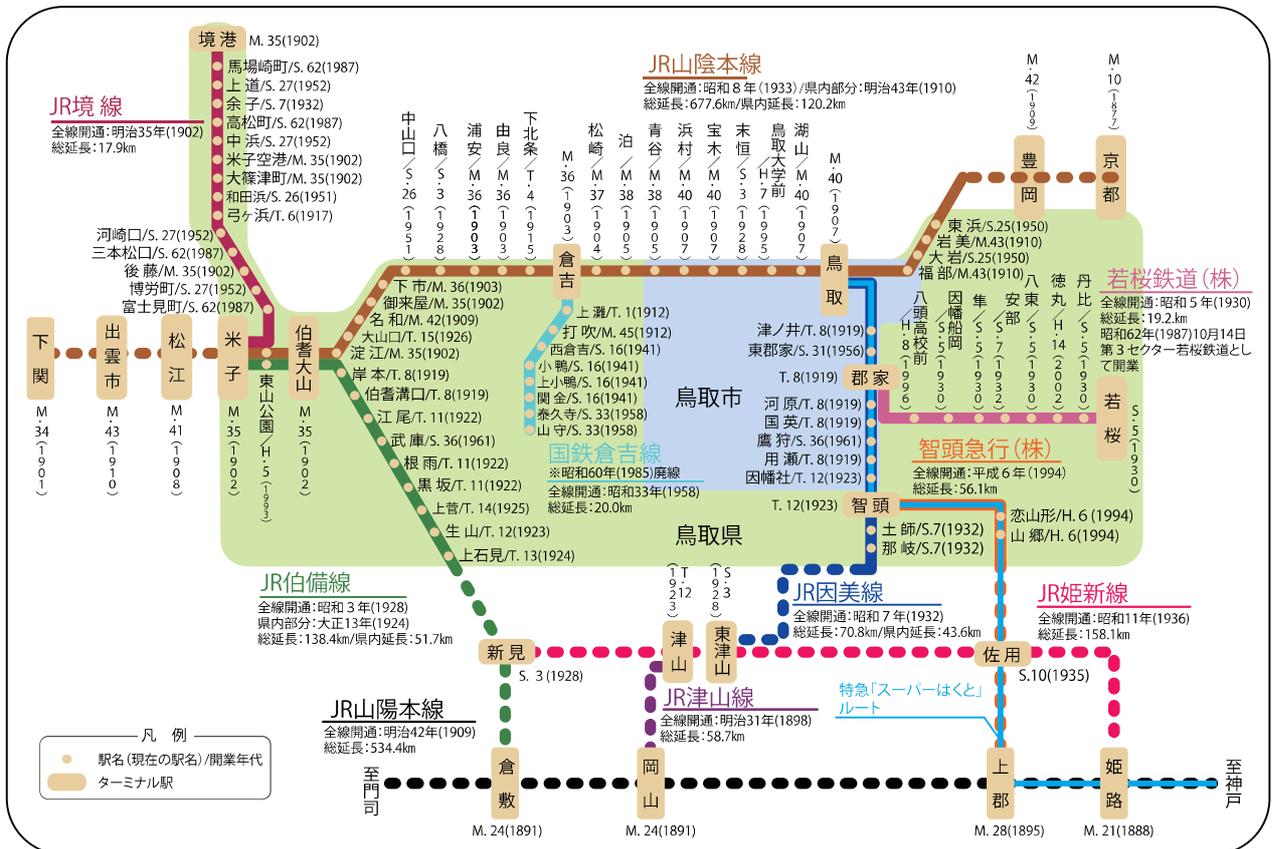
山々で隔絶された地形のため交通網の整備は遅れ、近代国家を目指す日本のなかで、「文明開化」から取り残された陸の孤島のような状態でした。山陰道に位置する本市にとって、京阪神と繋がる鉄道の開通は、近代都市として成長していくために必要なことでした。

● 明治45年(1912)の鳥取の鉄道網



本)となり、倉吉線は廃線となりましたが、若桜線は第3セクターの若桜鉄道として運行しています。さらに平成6年(1994)に開通した智頭急行の特急「スーパーはくと」は、古代からの山陰山陽の連絡路、近世の参勤交代のルートに沿うように走り、京阪神と本市を結ぶ旅客輸送の大動脈になっています。

● 昭和62年(1987)~令和3年(2021)の鳥取の鉄道網



3 | 城と町と街道

中世から近世にかけて築かれ、動乱の時代を物語る「村々の山城」は、因幡国内の谷すじや街道に沿って点在しています。これらのうち、いくつかの城は地理的条件からいつしか交通の要衝となり、人と物が集まることで発展しました。

その繁栄ぶりは、山城とともに絵図にも描かれ、当時の様子や姿をうかがい知ることができ、現在も残る城跡や麓の城下町は、絵図に残る姿を留めています。



天神山城跡



中世の因幡国の中心地となった天神山城のある布勢地区は、当時近江商人による交易で栄えていました。

鳥取城跡



鳥取城が築かれた久松山の麓は、因幡国内の主要な街道が集まる場所でした。



鹿野城跡



亀井茲矩が城主となり発展した鹿野城とその城下町は、鹿野往来沿いの交通の要衝の位置にありました。

景石城跡



景石城の麓にある用瀬は、智頭往来の宿場町として発展しました。

3 城と町と街道

中世の鳥取の中心地

天神山城と湖山池

日本一大きな「池」とされる湖山池※1は、室町時代の頃まで日本海と繋がった内海でした。湖山池東岸の布施地区は、当時は「布施」と表記され、港として機能も持ち、近江商人が因幡と京都の交易を行い繁栄していました。

※1湖山池や湖山川・湖山町は、江戸時代では「小山池・小山川・小山村」とされていました。



● 港街布施と天神山城想定図

中世の交易都市 布施

布施(布勢)は因幡と京都との交易を行っていた近江商人たちによって繁栄しました。絵図に描かれた交易の街は、湖山池に通じる水路が引かれ、「舟入」が設けられていたと考えられます。



● 山王日吉神社(布勢の山王さん)
卯山の山腹にある神社で、近江国(滋賀県)坂本の日吉大社から勧請して祀ったのが始まりとされています。



● 山王日吉神社参道入口
交易都市布施の「舟入」と思われる場所です。

因幡国の守護となった山名勝豊は、湖山川のほとりの天神山に城を築き、因幡国の守護所を置きます。こうして守護所の機能を持った天神山城は、因幡国庁に代わって約100年にわたり山名氏が因幡国を治めていく拠点になりました。



● 寛文大図 部分 (布施周辺の一部) 倉田八幡宮所蔵
右側の「吉祥」と記載されているところが天神山城

天神山城跡には^{くるわ}曲輪群が良好に残っており、何らかの施設があったことがうかがえます。またこの平地部には鳥取県の発掘調査によって堀の痕跡や陶磁器類が大量に出土しており、守護所として機能していたことが推察されます。



● 天神山城跡(右奥の山は久松山)

絵図に見る 水路

絵図に見られる湖山川から布施の外延部を巡っている水路は、現在の湖山川から鳥取緑風高等学校の西側や住宅地内を通り、日吉神社参道付近に至る水路とほぼ同じところを通っていたと思われます。



3 城と町と街道

ひのもと
「日本二かくれなき名山」
久松山

鳥取城と その城下町

日本海から続く山伝いの独立峰である久松山に、因幡山名氏によって築かれた鳥取城は、因幡国守護が置かれ因幡国の拠点となりました。その後、毛利氏の支配下となった頃、久松山の麓にはいくつもの街道が会う交通の要衝となっていました。



● 天正9年(1581)鳥取城攻めの陣構え想定図

● 城絵図に見る鳥取城の移り変わり
江戸時代初期
内堀完成。



因州鳥取之城之図(部分)
岡山大学附属図書館所蔵

鳥取城

元和3年(1617)、池田光政の襲封によって、鳥取藩は因幡・伯耆二国を合わせて32万石の石高の大藩となりました。鳥取城は藩の規模の拡大(長吉時代6万石→32万石)にあわせて拡張され、日本有数の大藩の居城として整備されていきました。因幡山名氏が築いた中世の城郭と、鳥取藩主池田家によって近世城郭の遺構が共存する他に類を見ない城郭です。



● 因幡鳥取城籠城布陣図 鳥取市歴史博物館所蔵

天正9年(1581)秀吉の鳥取城攻めが起こります。鳥取城主吉川経家は、周囲を急峻な斜面に覆われ、鳥取平野を一望できる鳥取城の優れた防衛性と眺望を、「日本ニかくれなき名山」と評し、同じ山伝いに築かれた雁金山城、丸山城とともに秀吉を迎え討ちました。

対する秀吉は、久松山の東側の本陣山に「太閤ヶ平」を築き、麓に集まっている街道を抑えるように布陣して補給路を断ち、鳥取城を孤立させることによって落城させました。

元和5年(1619)
二ノ丸三階櫓など主要部が完成。



因幡鳥取城廻絵図(部分)
岡山大学附属図書館所蔵

宝暦12年(1762)
天守が焼失し、天守台のみが残る。



鳥取城修復願絵図
鳥取県立博物館所蔵

万延元年(1860)
二ノ丸、三の丸が拡張される。



鳥取城修復願絵図
鳥取県立博物館所蔵

3 城と町と街道

鳥取城とその城下町

鳥取市街地のランドマークとして親しまれている久松山は、昭和62年(1987)に久松山のほぼ全山と太閤ヶ平が国指定史跡「鳥取城跡附太閤ヶ平」として指定されました。



山上ノ丸から
鳥取平野と日本海を望む



太閤ヶ平から
久松山を望む



鳥取城跡は、久松山山頂の山上ノ丸と山麓の山下ノ丸からなり、東側の本陣山には、秀吉が築いた太閤ヶ平も残ります。



宝隆院庭園
文久3年(1863)第12代鳥取藩主池田慶徳が若くして未亡人となった先代慶米の夫人「宝隆院」を慰めるために造営したものです。



石切場
元和5年(1619)頃から始まった城の大改修に石垣の石材を調達した石切場跡です。



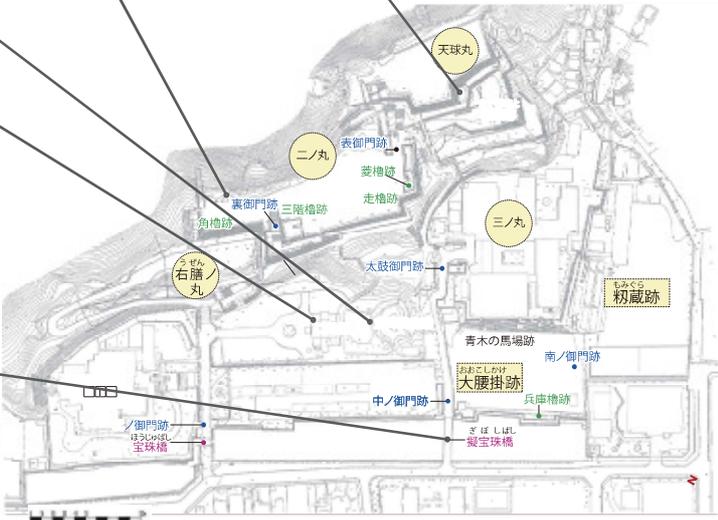
天球丸 巻石垣 (復元)
文化4年(1807)頃に背後の石垣の崩落を防止するため築かれた球面石垣です。



仁風閣
フレンチ・ルネッサンス様式の建築で、山陰地方に現存する唯一の本格的近代洋風建築となっており、国の重要文化財に指定されています。



擬宝珠橋
鳥取城の大手橋として元和7年(1621)に創建され、明治30年(1897)頃まで存続していた擬宝珠橋は、平成30年(2018)に復元されました。

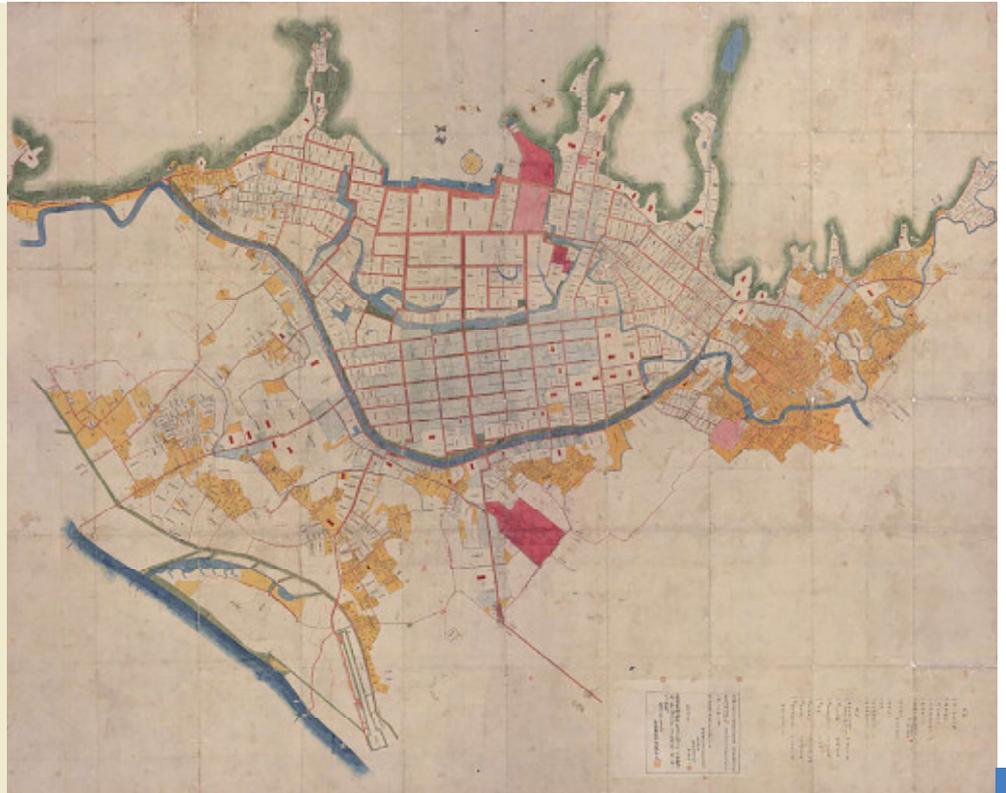


山下ノ丸

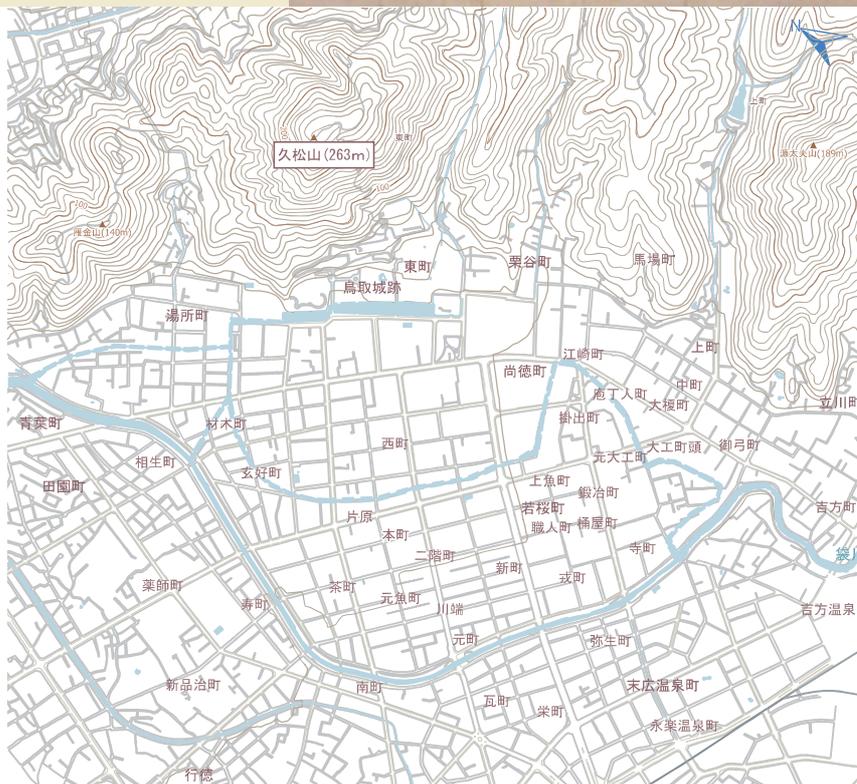
江戸時代に入ってから鳥取城の改修と並行して城下町の整備も行われました。現在残る城下町の絵図などから町割が確認でき、現在の鳥取市街地の原型となっていることが分かります。

鳥取御城下全図

原図は鳥取藩の算術家の中村真一らによって安政5年(1858)11月に完成したもので、1/600の縮尺で描かれています。屋敷地には大きさ(間数)が記載されています。明治に入ってから、収税のための資料として用いられたと推測されます。

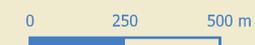


鳥取県立図書館所蔵



現在の鳥取市街地

鳥取城下町の地割は江戸時代を通じて不変で、周辺村落の都市化による膨張は見られるものの、基本的には、大きく変わることはありませんでした。



3 城と町と街道

亀井茲矩の
居城

鹿野城と その城下町

鹿野往来と三徳往来が分岐する地点にある鹿野城とその城下町は、交通の要衝として重要な位置にありました。天正8年(1580)秀吉の第1回鳥取城攻めで、鹿野城や宮吉城、^{くしな}狗戸那城を亀井茲矩が攻略したことにより、秀吉より鹿野城主を任せられました。



● 鹿野城と城下町周辺状況図

街づくりの知恵 亀井茲矩の

妙見山の麓に広がる鹿野城の城下町は、河内川や水谷川が運んだ砂や礫が堆積してできた台地の上に形成されています。

茲矩は、台地内を通過して河内川に合流していた水谷川の付け替えを行い、元の水谷川を鹿野城の内堀として利用するほか、新水路は台地内の城下町の飲料水として利用するため、水路を引

きました。

また、現在の水谷川を設けることで城下町内へ流入する川の水量を逃がし、氾濫が起きやすい河川の合流地点を城下町から離れた位置に設け、末用川も付け替えて河内川への合流点を分散させることで、鹿野城の防衛線としました。

おうしよ
王舎城※1 跡図

『因州記』※2に記されている鹿野城の図で、妙見山山頂の天守から山裾に向かって二ノ丸・三ノ丸などの曲輪や、オランダ櫓・朝鮮櫓などの建造物があったことがうかがえます。

※1王舎城

鹿野城の別名で、釈迦が説法した地の一つとされる古代インドのマガタ国の首都の名です。

鹿野城主となった亀井茲矩が、仏教に由来する名を付けたといわれています。

※2因州記

亀井茲矩二百五十回忌の際に、津和野から鹿野の譲傳寺へ香代として遣わされた湯舎人が著した道中記です。



津和野町 太鼓谷稲成神社所蔵



鹿野城跡縄張図

現在の鹿野城跡

亀井茲矩が鹿野城主となった後、妙見山山麓に石垣を巡らせた本丸・二ノ丸や、旧水谷川の川岸に盛土して築かれた内堀・外堀が現在も残っています。

交通の要衝の城下町

鹿野

SHIKANO



鹿野の街並み

鹿野の街並みは、建物の軒が低く抑えられ、落ち着いた佇まいを見せています。これは、洪水の少ない台地の上に作られたため、床を高くする必要がなかったため可能となった街並みの景観です。

鹿野の建物

町の中で残っている古い建物は江戸末期から明治時代のもものがほとんどで、建物は「京風千本格子」が多く残ります。これは応仁の乱(1460年代)によって、京都から宮大工が戦乱を避けるため鹿野に来たことがきっかけで伝わり、その宮大工の子孫は江戸時代になると西因幡の大工頭を務めたといわれています。



昭和18年(1943)鳥取市を震源とするマグニチュード7.2の「鳥取大地震」によって、鹿野町末用地区で断層が約1.5m横に移動し、約0.5m沈下しました。当時地表に現れた鹿野断層のずれの一部が水路に残り、現在鳥取県の天然記念物に指定されています。この時の地震でも、台地の上にある鹿野の街には、大きな被害はありませんでした。

現在の鹿野断層

鹿野断層の位置
(一部推定)

亀井茲矩が鹿野城主となった頃、鹿野往来は因幡国と伯耆国を結ぶこの地域の動脈でした。亀井茲矩がこの町の基礎を築き、その息子である政矩によって城下町として整備され、鹿野往来沿いの交通の要衝として発展しました。

河内川と水谷川が運んだ砂と礫で形成された台地は、水はけが良く地盤も締まっているため、洪水の少なさと地震への強さが特徴で、現在に残る街並みにもその特徴が見て取れます。

鹿野の水路



亀井茲矩により造られた水路が、町の中を縦横無尽に流れています。取水は東の水谷川、西の河内川から引き込み、当時のまま今なお流れ続けています。この水路に使用されている石材は、この地方で産出される鷲峰石(安山岩)であるとされています。

牛つなぎ石・馬つなぎ石



城下町の中央を鹿野往来が通り、鹿野祭の屋台が通るメイン通りには、今でも江戸時代に設置されたといわれる牛つなぎ石や馬つなぎ石(写真の丸枠内)が残っており、当時、交通・商業の要衝の地であったことがうかがえます。

鹿野城とその城下町の基礎を築いた亀井茲矩は、慶長17年(1612)鹿野城内で57年の生涯を閉じました。法名「中山道月大居士」と刻まれた茲矩の墓所は、鹿野の町が見渡せる武蔵山(気高町山宮)の明星ヶ鼻にあり、今も鹿野の町を見守り続けています。

武蔵山の名は、亀井茲矩の官職銘「武蔵守」によるものです。

津和野藩主亀井家墓所附 亀井茲矩墓



墓石

法名「中山道月大居士」と刻まれた墓石

3 城と町と街道

山あいの
交通の要衝

景石城と 用瀬・佐治

江戸時代に鳥取藩主池田家の参勤交代に使われた智頭往来。鳥取城を出てから最初の宿場町であった用瀬は、佐治川をさかのぼって辰巳峠を越えて美作国へ向かう街道との分岐点にあり、交通の要衝として栄えた地域です。



● 景石城と周辺状況図



景石城跡

智頭往来の交通の要衝である用瀬を眼下に納める景石城は、創建は定かではありませんが、因幡国守護の山名氏の家臣であった用瀬氏が拠点とした山城で、天正8年(1580)羽柴秀吉の鳥取城攻め以降は磯部氏が景石城の城主になりました。その後、江戸時代に入り鳥取城主池田家が因幡国を治めるようになると、景石城は廃城となりました。

智頭往来の宿場町

用瀬

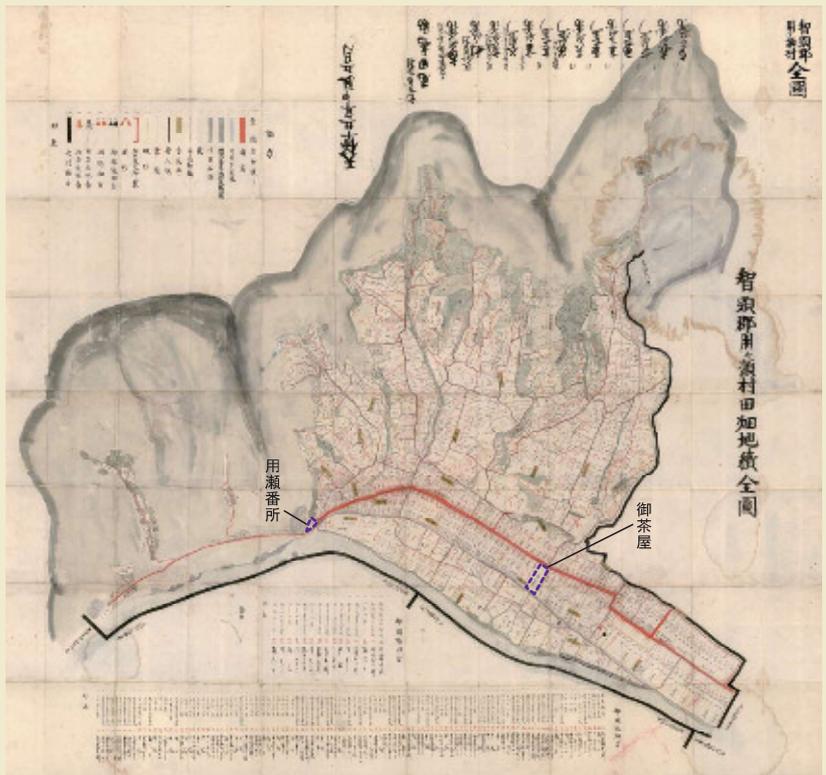
MOCHIGASE

智頭郡用ヶ瀬村 田畑地続全図

個人蔵(鳥取市歴史博物館寄託)

江戸時代の天保15年(1844)に描かれた「用ヶ瀬村」の絵図面です。

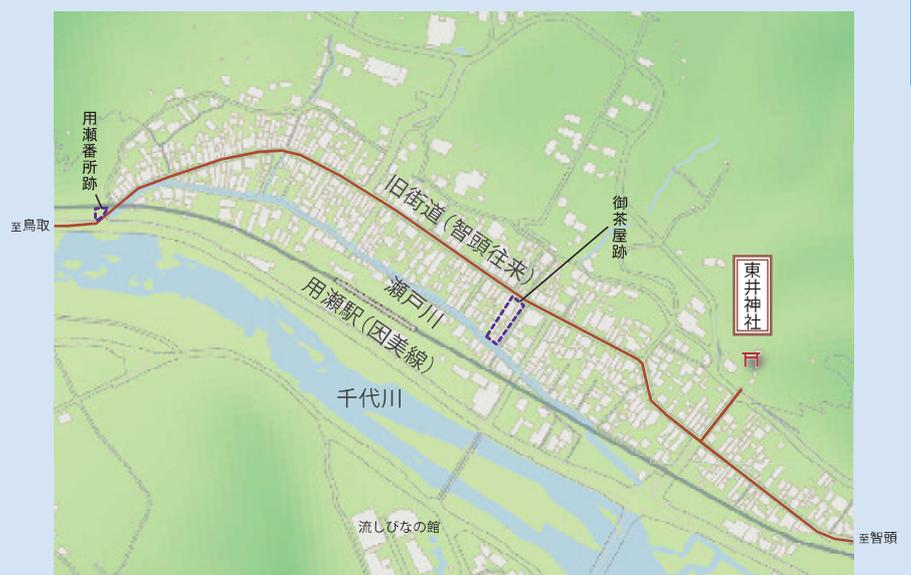
「上方街道の駅にて鳥取より四里二十一町二十六間と云。町の長さ八町、街道の正中に小川通りて、町並奇麗に軒をならぶ。毎月六度、二・七ノ日、用瀬市とて郡中の人集り諸物を交易す。繁昌の地也。専ら行李を造り、又煎茶を製す。骨柳は国中の名産なり」と、『因幡誌』にも記されている用瀬は智頭往来筋にありました。参勤交代でもその道が利用され、藩主は鳥取を出発して最初に休憩したのが用瀬でした。その際に藩主が休憩する「御茶屋」が置かれていました。



用瀬の繁栄

用瀬は江戸時代中期から末期を最盛期として、政治・経済・文化的繁栄が続ききました。智頭往来のほか千代川を利用した河川交通の拠点であり、物資の集積地でした。この宿場町で毎月6回行われていた二七の市では、周辺の村々から人々と物資が集まり、活況を呈しこの市は昭和の始めまで続いていました。

江戸時代から繁栄した用瀬の町割りは現在もよく残っています。



● 現在の用瀬

宿場町として栄えた用瀬は、背後にそびえる三角山山系から流れる川を町の区割として利用し、街道筋の裏側に住民の生活用水として利用できる瀬戸川が設けられ、洗いのや、水汲みの作業を行う「イトバ」が各戸ごとに設けられました。



瀬戸川

この地域で裏側を意味する「セド」の音を充てて瀬戸川と呼ばれています。宿場町の繁栄に伴って旅館や飯屋が増えたことで、精米等のための水車が整備され、最盛期には17基の水車が稼働していました。



●イトバ

用瀬のひな送り

一切の災いを人形(ひとがた)に移して川や海に流す風習が残る貴重な伝統行事で、江戸時代から伝わっていると考えられています。現在は千代川で行われていますが、元々は瀬戸川で行われていました。



町の背後にそびえる三角山の山頂に鎮座する三角山神社本殿は、弘化2年(1845)鳥取藩主の発願によって勧請されています。また用瀬の産土神が鎮座する東井神社本殿は、明治5年(1872)鳥取藩の尚徳館(藩校)内の社殿を移築されたもので、両神社とも鳥取藩とのつながりがうかがえます。

三角山神社本殿



創建については定かではありませんが、記録に残る棟札で最古のものは寛永3年(1626)のものがあります。修験道の行場として知られ、花崗岩の巨石が露出する山頂に営まれた神社です。

東井神社拝殿



天暦年間(950年頃)に山城国紀伊郡八坂鎮座の八坂神社のスサノオノミコトを勧請して、妙見大明神と称していました。記録の上では、慶安2年(1649)のものが一番古いものです。

智頭往来は、国府平野に因幡国庁が置かれた頃から、因幡国司に就任した国守たちが京から播磨を経てこの街道を通っていました。奈良時代の開創の由緒を伝える大安興寺や東光寺経筒など、7世紀頃因幡国にもたらされた仏教文化の痕跡が街道沿いに残っています。

大安興寺

和銅2年(709)開基とされ、修験道の信仰とともに発展した寺院です。中世の兵火により焼失したためその後再興が図られ、寛文12年(1672)に再建されますが、昭和37年(1962)に再度焼失しました。現在は、ふもとの鷹狩の地に寺院を構えており、寺には鎌倉時代頃と見られる仏画などが伝わっています。



● 絹本着色釈迦十六善神像



● 絹本着色愛染明王像

東光寺

和銅元年(708年)、行基による創建と伝えられ、勅号を瑠璃山長福寺としましたが、2度の火災に遭い、鳥取藩主池田光仲の尽力によって再興された後、寺号を東光寺としました。昭和51年(1976)裏山の経塚から鉄製・青銅製の経筒が発見されました。このうち鉄製の経筒は、全国的に見ても出土例が少ない貴重なものです。



● 東光寺 本堂



● 東光寺経筒(鉄製)

写真提供:鳥取市歴史博物館

千代川を使った河川交通の南端であった用瀬から西に折れると、辰巳峠を越えて美作国へと続く街道が通っています。街道沿いには、烏ヶ城や余戸城・小露路城などの山城が点在します。この街道は、中世から近世までの主要な道となっており、佐治で生産される漆や因州和紙などが運ばれていました。

佐治の特産物

品質の良さで知られた佐治漆や、藩の御用紙として使用された因州和紙、軽くて丈夫な佐治の板笠など、この地域で生産された特産物は各地へ運ばれ、鳥取藩の収入源となっていました。現在佐治の因州和紙は「因州佐治みつまた紙」として鳥取県の無形文化財に指定されています。



● 因州佐治みつまた紙



● うるしかきの用具

写真提供:鳥取市歴史博物館

4 四季の祭りと伝統行事

麒麟獅子舞



麒麟とは

麒麟は、すぐれた為政者が民衆のための政治を行うと、その徳をしたって現れるとされる中国の想像上の動物です。

因幡東照宮に登場した麒麟獅子舞

市内で「獅子」と呼ばれる麒麟獅子舞は、ほぼ一年を通じて市内のどこかで、主に神社の祭礼で登場しています。

この麒麟獅子舞は、承応元年(1652)、因幡東照宮勧請を祝う「権現祭」が盛大に執り行われ、このときの神幸行列の先払いとして登場したのが、麒麟を思わせる獅子頭を持つ獅子に、真っ赤なあやし役の猩々が付いた獅子舞でした。

江戸時代にはこの獅子舞を「獅子」と呼び、鳥取東照宮ではその後も必ず「獅子」を登場させ、鳥取藩が獅子舞を指揮・監督する「獅子庄屋」を置いたことで、江戸時代から明治・大正・昭和と時代を跨いで広がっていきました。



●麒麟獅子の舞い

鳥取市内の麒麟獅子舞は現在でも「獅子」と呼ばれており、霊獣麒麟を思わせる大きな獅子頭を持ち、真っ赤な「蚊帳」とよばれる胴幕に大人二人が入って舞う獅子舞で、あやし役の猩々とともにゆったりした重厚感のある舞いを見せます。



東照宮祭礼絵巻
鳥取市歴史博物館所蔵

◆鳥取東照宮

【時期】中断

【創始】江戸初期、池田光仲公が、三代徳川家光公の許しを得て、徳川家康を祀る日光東照宮より御神霊を歎請し因幡東照宮を建立、権現祭で奉納芸能として獅子舞は盛大に行われた(1650年)。

【特記】権現流という豪華を極めた御幸祭であった。



◆宇倍神社

【時期】宵宮：4月20日・例祭：4月21日に近い土又は日・秋祭：9月21日

【創始】江戸初期、樗谿神社建立時(1650年)に神幸祭で行われた。

【特記】権現流を受け継がれた御幸祭を行っている。



◆聖神社

【時期】5月第3土・日、9月18日

【創始】江戸中期(1778年)

【特記】隔年の大祭は、夕方にも舞われる。



◆倉田八幡宮

【時期】4月第2土曜日・日曜日

【創始】江戸中期

【特記】舞いが独特であり、いわゆる権現流とは流を異にしているようである。獅子頭は大きく、後被りに蚊帳の窓が無いという古風を保っている。



◆大和佐美命神社

【時期】10月第2日曜日

【創始】江戸後期以前

【特記】鳥取県無形民俗文化財に指定、5年に一度大祭がある。獅子が剣を持って舞うという特徴的な舞がある。

麒麟獅子舞の広がり

江戸時代、因幡東照宮に登場した麒麟獅子舞は、智頭往来や若桜往来などの街道に沿うように広がりを見せています。

その広がり方は、因幡国内の主要な神社(宇倍神社や聖神社など)にまず伝わり、そこから各地へ伝わったケースと、東照宮から直接伝わったケースがあります。



最古の獅子頭



現存する最古の獅子頭は室町時代に作成されたと思われるもので、国府町にある因幡万葉歴史館内に保管・展示されています。この獅子頭は国府町内の稲荷神社で使用されていたもので、特徴的な一本の角を持ち朱塗りが施されています。

鳥取市内の麒麟獅子舞分布図



4 四季の祭りや伝統行事

四季折々に様々な祭りや行事があります。それらは、自然とともに暮らした人たちの、家族の健康や五穀豊穡への想いが、かたちとなって表れたものです。



春

雪解けとともに草木が芽吹き、生命の息吹が感じられる季節、水田には水が張られ、田植えの準備が始まります。千代川流域の神社などは、春の訪れを祝うかのように例大祭などが執り行われます。



宇倍神社 例大祭

毎年4月21日に近い土曜又は日曜日に行われる例大祭では、大御輿による御幸行列などが行われます。



ひな送り

用瀬町に伝わる江戸時代から続く伝統行事で、旧暦の3月3日、男女一对の紙雛さんだわらを棧俵に乗せて無病息災を祈りながら千代川に流します。



鹿野城跡公園の桜(4月)
鹿野町

季節の
風物詩



砂丘らっきょう(5~6月収穫)
福部町



賀露神社の麒麟獅子舞(4月)

季節ごとの
獅子舞



口佐治神社の神楽獅子舞(4月)

今に伝わる地域の伝統行事は、季節の風物詩として私たちの生活に根付いています。



しゃんしゃん祭

鈴の付いた踊傘を「シャンシャン」と鳴らしながら街を踊り歩く鳥取市最大の祭りです。この踊りは、「因幡の傘踊」を誰でも踊れるようにアレンジしたもので、毎年約3,500人の市民が参加して祭りを盛り上げています。



夏

菖蒲綱引き

地域組による伝統行事で、綱の材料や、綱を使った行事や所作、綱に災厄を負わせて海に流すことなど、地域によっての特色があります。



アユ(6~9月下旬)
千代川

季節の 風物詩



二十世紀梨(8~9月収穫)
市内一円



袋河原神社の麒麟獅子舞(9月)

季節ごとの 獅子舞



片山神社の麒麟獅子舞(9月)

強い日差しと気温の上昇により、植物が大きく成長し、人々の活動も活発になる季節。子どもの成長を願う菖蒲綱引きや、先祖を迎えるための盆踊り、勇壮な傘踊りなどが行われます。



秋

披露し、神をもてなします。

収穫の秋、自然の恩恵を最も受ける季節。人々は、収穫の感謝と、翌年の豊作を祈願するため、音楽や舞いを披露し、神をもてなします。

市西部の鹿野町やその周辺の神社では例大祭が行われます。

江波の三番叟

用瀬町えなみの江波神社例祭では、神社境内の回り舞台で演じられます。江戸時代中頃、大坂の商人が歌舞伎とともに教えたともいわれています。



鹿野町周辺の神社の例祭

鷲峯神社じゅうぼう、加知弥神社かちみ、志加奴神社しかぬなど、鹿野町周辺の神社は、揃って秋に例祭が行われます。

● 加知弥神社



らっきょうの花(9月)
福部砂丘

季節の
風物詩



日光生姜(10~11月収穫)
気高町 日光



大和佐美命神社の麒麟獅子舞(10月)

季節ごとの
獅子舞



山上神社の麒麟獅子舞(10月)



©tottori Pref.

酒津のトンドウ

1月15日に近い土・日曜に行われるもので、中心に高さ4～5mの松を立て、周囲に12ヶ月を意味する12本の孟宗竹を立てかけ（閏年は13本とする）むろで覆い、頂部には扇と鯛を取り付け、注連縄飾りをぐるぐると巻きつけたものがトンドウで、日曜の深夜1時に火を付け、無病息災を願います。



大国舞おどり

だいくまい
大国舞は円通寺を中心にして因幡一円に伝承される民踊です。起源は明らかではありませんが、佐治町津無の大黒舞には大黒さまが八上姫と飯盛山を散策の折、津無の村人がこの踊りを踊って喜ばせたという伝承が残ります。



松葉ガニ(11～3月)
賀露港

季節の
風物詩



小豆雑煮(正月)
鳥取平野一円

出典:『うちの郷土料理』(農林水産省)の画像を加工して作成



大森神社の麒麟獅子舞(1月)

季節ごとの
獅子舞



江波神楽獅子舞(1月)

新しい年を迎える季節、人々は新年の門出を祝いつつ、無病息災で一年を過ごせるよう祈りを捧げ、厳しい冬を過ごします。

5 石ぶみが語り伝える歴史

因幡国庁が置かれた国府平野には、面影山・今木山・甕山と呼ばれる山容の美しい三つの山が並び立ちます。この地に刻まれた万葉の歴史と奈良の都に並ぶ大和三山になぞらえて、「因幡三山」と名付けられました。



奈良時代、因幡国司として着任した大伴家持や、平安時代の在原行平。彼らがこの地域で詠んだ歌は後年石に刻まれ、私たちを古代因幡国の万葉の世界に誘います。

万葉集と唱歌の歌碑

第4章

新しき
年の始の初春の
今日降る雪の
いや重け吉事

大伴家持歌碑(国府町庁)



立ちわかれ
いなばの山の峰に生ふる
まつとし聞かば
今帰り来む

在原行平歌碑(国府町庁)



藤波の
散らまくおしみほととぎす
今木の丘を
鳴きて越ゆなり

詠人不知歌碑(国府町庁)

ふる雪の
いやしけ吉事ここに
うたひあけけむ
言ほきの歌

佐佐木信綱歌碑(国府町庁)



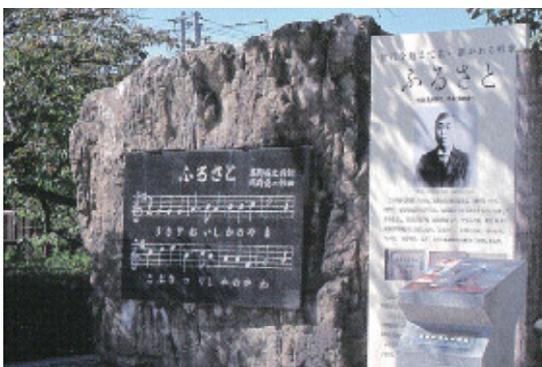
古代因幡国で詠まれた歌や近代に活躍した本市出身の作曲家が残した唱歌の歌碑、地域の発展に貢献した人たちの功績を称える記念碑、近世の名力士の墓や塚と名石工といわれる「川六」の石造物など、本市の歴史を伝える石造物が残されています。

明治時代、音楽教育の教科となった「唱歌」で、鳥取市出身の岡野貞一は「故郷」、「朧月夜」などの作曲を手掛け、そのメロディーは私たちの心に深く刻まれています。

貞一が作曲した作品は、歌碑となって市内各所に設置され、彼の功績をたたえ、郷愁を誘うそのメロディーを思い出させてくれます。

岡野貞一

明治11年(1878)2月16日、鳥取県邑美郡古市村(現・鳥取市古市)に生まれました。姉の寿美について通い始めた鳥取教会で幼少より賛美歌に親しみ、14歳の時洗礼を受けます。その後、岡山へ転勤した姉を頼り、明治26年(1893)、岡山県にあるキリスト教系の^{びょう}微陽学院に入学。英語の勉強に打ち込みます。明治28年(1895)に上京し、9月には高等師範学校附属音楽学校(現・東京藝術大学)予科に入学。翌年本科に進みます。在任中に文部省から小学校唱歌教科書編纂委員を命じられ、『尋常小学読本唱歌』『尋常小学唱歌』などの編纂にたずさわり、多くの唱歌を作曲しました。長野県出身の国文学者 高野辰之の詞に曲を付けた「故郷」「朧月夜」「紅葉」などは、100年以上経った今日でも歌い継がれています。



●「ふるさと」歌碑(久松公園入口)



●「おぼろ月夜」歌碑(鳥取市立醸風小学校前)



●「もみじ」歌碑(鹿野町公園)



●「桃太郎」歌碑(袋川土手)

写真提供: 鳥取童謡・唱歌とおもちゃのミュージアム(わらべ館)

先人たちの記念碑

農業が主要産業であった時代、砂丘地の開拓や地域発展に貢献した先人たちがいました。この業績をたたえる顕彰碑や記念碑が建立されています。

福部町



● 佐々木甚蔵顕彰碑

江戸時代末期、当時あった湯山池を、私財を投じて干拓を行い、飛砂に苦しむ農民を救った宿院義般と、大正時代、砂丘地のらっきょう栽培に成功し、「ふくべ砂丘らっきょう」の基礎を築いた佐々木甚蔵の顕彰碑です。



● 宿院六平太義般顕彰碑

湖山町



● 砂丘開拓記念碑

米子の船越作左衛門がこの地に移り住み、天明5年(1785)に鳥取藩に開拓を願い出て湖山砂丘の開拓事業に乗り出し、親子三代に渡りクロマツの植林に挑み続けるなどして砂丘畑の開拓に成功しました。この開拓を伝える記念碑が建立されています。

気高町

享保3年(1718)、鳥取藩土和田得中が、姉泊一帯の新田開発を願い出て、四代に渡り新田開発を行い、その開発された新田に新村を立てることが認められ、文化14年(1817)に「和田村」となった場所は、現在下原新田、姉泊新田という地名が残っています。この開拓を伝える記念碑が建立されています。

● 開拓記念碑



亀井茲矩



● 日光池干拓記念碑(気高町)

領地であった高草郡と気高郡内で、新田開発を行い、このうち代表的な日光池干拓の記念碑が建立されています。



● 亀井茲矩公顕彰碑(河原町)

延長約5里(約22km)、灌漑面積約1,300町歩(約1,290ha)の水田を開いた大井手用水。その功績をたたえた顕彰碑が建立されています。

力士塚と狛犬

江戸時代、相撲の盛んだった因幡の力士たちの力士塚。また幕末の因幡国気多郡を中心に優れた石造作品を制作した川六の作品は、今も地域の人々に親しまれています。

力士塚

今も相撲の人気が高い鳥取市には、江戸時代に活躍した力士たちが眠る墓や、彼らの名前が刻まれた塚が点在し、相撲の人気ぶりがうかがえます。

両国梶之助



● 両国梶之助墓



● 錦絵「大日本大相勇力関取鏡」(部分)
鳥取市歴史博物館所蔵

気高町宝木出身の梶之助は、因幡・伯耆両国でその強さになうものがいなかったことから、「両国」の名が与えられたといわれます。色白で美男子であったと伝わる彼の墓は、地元気高町宝木にあり、墓には屋根がかけられ、鳥取市指定史跡として、大切に守られています。

山野井鷺之助

賀露町出身。鳥取藩お抱え力士となり、幕内を3場所務めますが、28歳の若さで他界しています。地元賀露町東善寺の門前に塚が建立されています。

写真提供：鳥取市あおや郷土館



川六の狛犬

ユーモラスな表情が特徴的な

鷺峯神社狛犬

幕末の石工・尾崎六郎兵衛。名石工といわれる彼の作品には、「川六」または「河六」と刻印されており、地元の人々から「かわろく」と呼ばれ親しまれています。

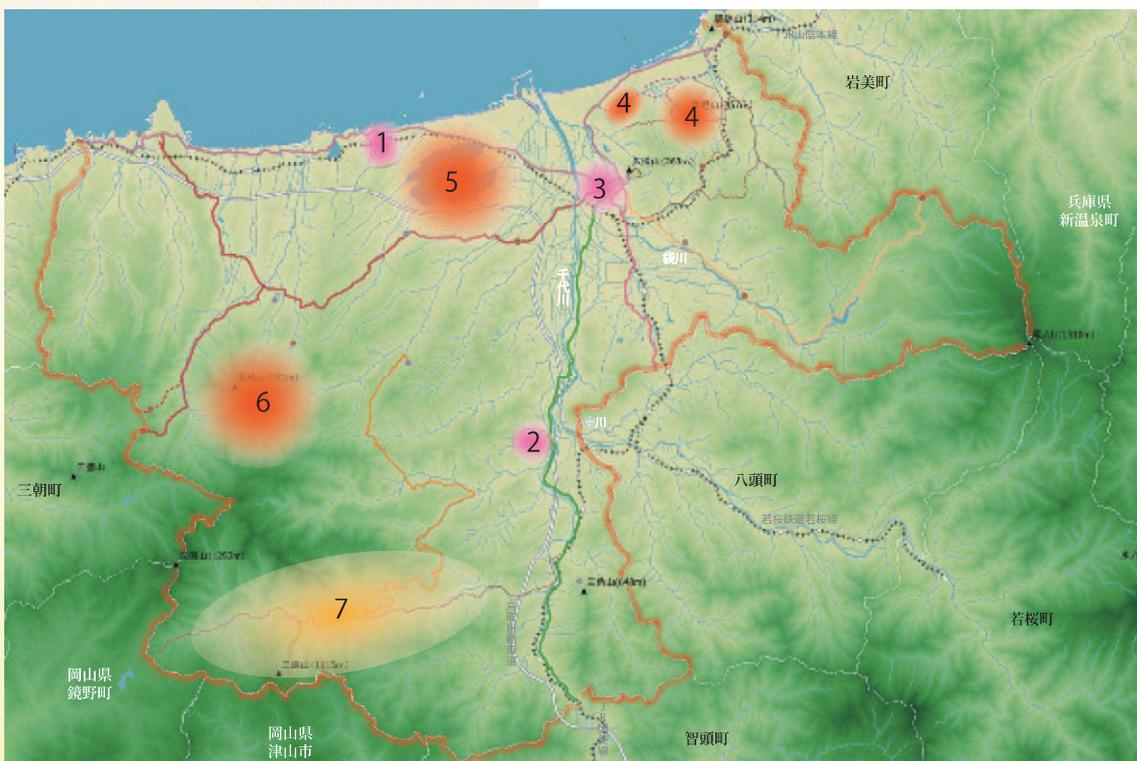


写真提供：鳥取市あおや郷土館

伝説と 伝承に見る 因幡の ものがたり

鳥取市の伝統文化や豊かで美しい自然とともに、
神代から続く伝説や地元で代々語り継がれる昔話、逸話がたくさん
残っています。

そのものがたりからは、自然とともに暮らした人々の生活の様子を
うかがい知ることができます。



● 伝説と伝承の舞台となっている場所

『古事記』
などに見られる
伝説

地域に
伝わる昔話

- 1 因幡の素兎
- 2 八上比売と大国主命
- 3 「鳥取」の地名の由来
- 4 おたね伝説
- 5 湖山長者
- 6 鷲峰山と大山の背比べ
- 7 佐治谷ばなし

『古事記』などに見られる伝説

1 因幡の素兎



『古事記』に記載されている神話のうちの一つで、「オキノ島」に住む兎が、ワニ(サメの事)を騙してから本土に渡ろうとしますが、本土に到着する手前で兎がたくらみをばらしてしまい、ワニに皮を剥がれてしまいます。

苦しむ兎が八上比売への求婚のため通りがかった八十神(大穴牟遲神の兄たち)に助けを求めますが、八十神に騙されて海水で体を洗い苦しみます。

遅れて通りがかった大穴牟遲神(後の大国主命)に真水で体を洗うなどして助けられたおはなし。

この兎を祭る白兎神社の周辺には、兎が体を洗ったとされる池やオキノ島等があり、神社では「神跡」として大切にされています。

2 八上比売と大国主命



兎に嘘を教えた八十神たちは、八上比売に求婚しますが断られ、兎を助けたため遅れてきた大穴牟遲神(大国主命)の求婚を受け入れ結婚するおはなし。大穴牟遲神がたどった道筋には、八上比売への贈り物をつめた重い袋を置いたとされる河原町の「袋河原」、恋文を書いたとされる「倭文神社」。また「円通寺」は、二人が縁を通じた「縁通路」が由来とされるなど、おはなしの名残とされる地名が残っています。

その後大穴牟遲神は大国主命となって八上比売の間に「木股神」という子をもうけ、地元である出雲に迎え入れますが、大国主命の妻である須勢理毘売に遠慮し、木股神を置いて八上郡に帰ることになります。

八上比売の死後、売沼神社に祀られ、その裏山にある嶽古墳は、八上比売の墓と伝えられます。

3 「鳥取」の地名の由来

『古事記』には、大和朝廷が諸国に鳥を捕らえさせ、これを税として納めるように命じていたという一節があります。当時、鳥取平野は、沼や、沢の多い湿地帯で、水辺に集まる鳥などを捕らえて暮らす人々が住んでいました。これらの人々が、大和に政権ができてからその支配体系に組み込まれ、「鳥取部」として従属するようになり、鳥取部が住んでいた地の呼び名が「鳥取」となったとされています。



地域に伝わる昔話

4

おたね伝説



国府町宮下の長者の家に女中として働いていた「おたね」が、いつも甘く美味しい柿を持ってくるので、不信に思った若者たちがおたねの後をつけたところ、おたねが白い大蛇へと姿を変え、多鯨ヶ池の中の小島にある柿の木によじ登り、柿を取っていたというおはなしで、多鯨ヶ池には、おたねを祀っている「多鯨ヶ池弁天宮」があります。

このおはなしは、別のストーリーもありますが、いずれも多鯨ヶ池と「多鯨ヶ池弁天宮」に通じるおはなしとなっています。

5

湖山長者



日本一大きな池とされている湖山池。この池はもともと湖山長者の水田だったというおはなしです。広大な水田を所有していた湖山長者は、「田植えを一日で終わらせる」という目的を達成させるため、金の扇で「太陽よもどれえ〜」と三度かざすと、沈みゆく太陽が戻り、昼間のように明るくなり、田植えを終えることができました。

しかし翌日、その田んぼは全て水につき、湖山池となっていたというおはなし。

6

鷲峰山と
大山の背くらべ



全国の神様たちが出雲での神在月の行事が終わった帰り道、鷲峰山と大山の神様が互いに自分の方が背が高いと言い争いになり、背を比べ合ったそうです。その結果、鷲峰山が勝ちましたが、悔しがった大山の神様は杓子で鷲峰山の頭をすくいとりました。

追いかけてくる鷲峰山の神様に驚き慌てて逃げようとした途端、杓子についていた土が落ち、鳥取市青谷町の建山になりました。鷲峰山の神が「土はもうないのか」と怒鳴ると、大山の神は袖を振って見せました。そのとき、土がどさっと落ち北栄町の袖振山になったそうです。

7

佐治谷ばなし



江戸時代の頃から、現在の佐治町の各家に伝わってきた民話で、全部で78話あります。

カニを食べたことが無い男性が港町からお嫁さんをもらい、お嫁さんの実家でカニを食べる時に食べ方を誤解して恥をかけた「カニのふんどし」など、登場人物の失敗談を題材として、人生の教訓としての佐治谷ばなしは親から子、子から孫へと伝わってきました。

7 民藝運動と地域の伝統産業

吉田璋也と民藝運動



© 鳥取民藝美術館

吉田璋也 (1898 ~ 1972)

明治時代に導入された西洋式の近代化は、機械化・大量生産と合わせ、生活習慣の変化をもたらしました。徐々に伝統技法などが廃れてゆく中で、日常生活で使う雑器などの地域の手仕事に美を見い出し、暮らしを豊かにする新作民藝運動を始めた吉田璋也。



© 鳥取民藝美術館

医師としての仕事の傍ら、民藝のプロデューサーとして活躍し、県内の職人たちと一緒に、民藝品の企画・デザイン・製作・生産・販売・消費に至る組織を作り上げました。

鳥取民藝美術館



© 鳥取民藝美術館

吉田の鳥取民藝美術館は、昭和24年(1949)に開館しました。民藝の美しさを世に広め、作り手の眼を養い、新たな創造の源となることを目指した鳥取民藝の発信地です。美術館の建物は国の登録有形文化財に登録されており、隣接してたくみ工芸店・童子地藏堂が設置されています。

古の人々は、土や木、水や火などを巧みに活用し、焼物や和紙などを作ってきました。その技法やかたち、意匠は時代とともに発展し、現在に息づいています。その美的価値を見出した民藝運動が盛んな地域でもあります。

吉田が育てた鳥取の民藝。現代作家たちが提唱する伝統技術を基礎に現代的感覚で制作された民芸は、吉田の精神を引き継ぎ、独自のスタイルを築いた匠たちが活躍しています。

現代の陶芸品

市内の窯元には、吉田璋也の指導や影響を受け、民藝運動に取り組んだ窯元が、その伝統を引き継ぎ、現在も創作活動を続けています。

牛ノ戸焼

江戸時代から続く牛ノ戸焼は、四代目小林秀晴が吉田璋也の指導を受け、鳥取新作民藝を代表する緑と黒の染分皿を最初に作りだしました。伝統を守りつつ現代にも馴染む器造りを続けています。



©tottori.pref



©tottori.pref

因州 中井窯

昭和20年(1945)に開窯し、二代目坂本實男が吉田璋也の指導を受け、新作民藝に取り組みます。三代目の章氏が緑・黒・白の三色染分皿に取り組み、現在は四代目宗之氏とともに作陶を続けます。

山根窯

青谷生まれの石原幸二氏は、昭和60年(1985)に青谷に工房を開窯しました。飴・白・黒・瑠璃といった釉色と、伝統技法を用いた自由でおおらかな作品を生み出しています。



©tottori.pref

前田昭博 国の重要無形文化財

「白磁」保持者(人間国宝)

河原町に「やなせ窯」を構える前田氏は、地元河原町出身で、大阪芸術大学在学中に出会った白磁の制作技法や表現について独自に研究を続け、活発な創作活動を展開しながら技を錬磨し、高度な技術を体得されました。作風は、伝統的な技法を踏まえつつ豊かな芸術性を備え、かつ現代感覚に溢れており、白磁の世界に新たな展開を示すものとして高い評価を受け日本の工芸界を代表する作家の一人です。



©前田昭博



©前田昭博

伝 統 産 業

豊かな自然と豊富な水資源を持つ本市には、それらを活かした産業が生まれ、現在まで受け継がれてきています。

因州和紙

因州和紙の起源は定かではありませんが、江戸時代には藩の御用紙としても、庶民の使用する紙としても盛んに生産されました。

現在は鳥取市の青谷町と佐治町が2大産地。書道用紙生産量日本一、手漉き和紙第2位を誇ります。

昭和50年(1975)国指定伝統工芸品として、昭和51年(1976)、「因州佐治みつまた紙」と「因州青谷こうぞ紙」が鳥取県無形文化財の指定を受けました。



写真提供：鳥取県

因州和紙の材料

「因州青谷こうぞ紙」は楮こうぞと雁皮がんぴを、「因州佐治みつまた紙」は三椏みつまたと雁皮を用いて作られます。これらの材料は、地域で大切に守られ、栽培されてきました。



写真提供：鳥取市歴史博物館



本市には、鳥取県が指定する伝統工芸士が制作する伝統的工芸品があり、それらは祭礼の道具や日用品として使用されてきたもので、本市の歴史文化等の保存・継承に欠くことができないものです。

因幡の踊り傘

竹扇堂(行徳)



©tottori.pref

県の無形民俗文化財「因幡の傘踊」に使用される傘で、因州和紙と真竹を使用し、耐久性を主眼に製作されています。

鹿野すげ笠

鹿野すげ笠を守る会(鹿野町)



©tottori.pref

鹿野城主亀井茲矩が、農村振興の一助に、副業として推奨したことに始まるとされており、昭和の半ばまで農業用笠として使用された必需品でした。

竹細工

仁人竹工房(末広温泉町)



©tottori.pref

弾力性に富み、耐久性のある竹は、古くから庶民の生活に密着した日常道具として加工、細工され発展してきました。近年は民芸として制作され、素朴な美しさが注目されます。

麒麟獅子

中山工芸(湖山町)



©tottori.pref

麒麟獅子の獅子頭の修復・復元・制作を行うほか、ミニチュアの置物や壁掛けなども作成しています。